

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Reminiscences

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 守夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1671">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1671</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 思　　い　　出

河　野　守　夫

私は昭和7年11月神戸で生まれた。生来、蒲柳の質で常に病気がちな子どもであった。特に、高校3年のときは肺結核を患い、1年間病床に臥した。そして大学の志望学部を理工系から文系へとやむなく変更した。当時は、文系より理工系のほうが強靱な体力が必要だと考えられていたからである。何故、数ある文系大学のなかから神戸外大を選んだのかというと、商社マンであった父親の実学志向による。当時、父親は商業英語学会に顔を出し、その関係で、神戸外大のカリキュラムを知っており、これを高く評価していた。ところで、結核は、神戸外大の2年のとき再発し、しかもこんどは重症で、再度休学した。当時の新薬のヒドラジッドのお陰で救われたが、この高価な薬を入手するために、両親はじめ病院関係の多くの方々が動いて下さった。

敗戦後の食糧難のなか、母は6人の子どもをかかえ、中国へ単身赴任していた父親の抑留が長引くなか、その苦労は並大抵ではなかったが、めったに手には入らない蛋白源を「おまえは栄養が不可だから」（私の通知簿の健康欄にいつもそう書いてあった）と私だけにそっと食べさせてくれたことを、よく憶えている。私には5人の兄弟姉妹がいたが、終戦時、戦災で焼け出された親戚や知人が、私の家に身を寄せていて、15人を超える同居者が一つ屋根の下にひしめいていた頃のことである。

私の家庭はカトリックであった。一方、漢学者であった祖父の影響もあつたか、日本の伝統的なしきたりや儒教的思想も合わせ持っていて、東洋的な規律も結構しっかりしていた。また、両親ともに英語をなりわいとしていた

こと、特に大正デモクラシーの時期に高等教育を受けた母親の持つ自由な雰囲気は、家庭に明るさをもたらしていた。

このような家庭に育ったことなかで、私に最も大きな影響を与えたのは宗教であった。私にとってキリスト教は、人生哲学の原点のようなものであった。家庭の規律のなかでも宗教が突出していた。まず、生きるための方策があって、その潤いの場として宗教があるのではなくて、宗教が原点にあって、その上に生活があった。戦後、阪急電車の電車賃にさえ事欠くほどの貧乏のなかで、日曜日、ミサにあづかるために、自宅があった西宮北口の近くから、教会のあった夙川まで、朝食抜きで、歩いて往復するようなことが普通に行われていた。宗教的な厳格さは父親の方針であったが、私は、これに反抗もし、カトリックの教義に強い疑問を抱くこともあったが、結局は、少年の頃のこの体験がわたしの思索の原点となった。六甲学園のカール・ライフ神父（のちの東京カトリック神学校長）の人格に傾倒し、県立芦屋高等学校時代、毎週神父のもとに通ったが、神父からはスコラ哲学の手ほどきを受けた。外大の学生でありながら、トマス・アキナスの経済思想を研究しておられた神戸大学の五百旗頭真治郎教授のゼミナールの合宿に、もぐりで参加させていただいて、科学的唯物論とは対極の立場にあるアカデミズムに浸りながら、マルクスやヘーゲルをかじる一方で、デユモリン、ホイベルス、エルリンハーゲン、カンドウ、岩下壮一、田中耕太郎などカトリックの論客の書物を貪るように読んだ。五百旗頭先生の専門は経済政策であったが、そのゼミの内容は哲学か神学であった。神戸外大では、非常勤講師としてきておられた印具徹先生の宗教学（トマスの神学大全とアンセルムス）を通して、Imago Dei（神の御姿）として作られた人間の理性が、原罪によってどの程度墮落したとみるべきか、ということが、人間観の大きな差をもたらし、同時にプロテスタントイズムとカトリシズムを分けることになったことを知った。この人間観の差は決して小さなものではなく、資本主義の生成にも大きな影響を与えることとなり（cf. マックスウエーバー）、個人の生き方にも差がでることを、

後程、外国を旅したり、プロテスタントの人たちとつきあうようになって実感することになる（会田雄次氏の著作に両者の行動様式の違いが述べられている）。

このような体験は言葉の研究に決して無関係ではない。言語の認識や生成、それに獲得のメカニズムを探る場合、ただ資料をこつこつと集めて行けば、その姿が自然に見えてくるという場合は全くないわけではないが（例えば、幼児言語の記述）非常に少ない。また、その資料は書物から集めるわけではないから、蒐集自体に手間がかかり、何かに焦点を合わせて行なうのでなければ、通例、非常に能率の悪い仕事になる。何に焦点を当てるか、そこに発想が必要となる。

私が言語のリズムという観点から研究に取りかかろうと思いついたのは、キリスト教の神概念が、日本人のそれと基本的に違うということに気づいたことと関係があった。

日本人が抱く神概念は、仏教の影響もあつてか、「静」であるのに、キリスト教のそれは「動」だと思われる。例えば、極楽浄土という言葉で表される至福の境地は心の煩悩を克服した平和で透明な「静」の極地を連想するが、キリスト教の「天国」は、その教義からすれば、神の愛が横溢した「動」の世界が浮かびあがる。そこは、神の愛に巻き込まれて震えるような幸福感に包まれ続ける境地を、神秘神学者たちは心に描いたのではないか。一般に、「神は愛だ」と言うが、「愛」は心理的に「動」を前提にしなければ成り立たない。すなわち、2つ以上のペルソナの心と心の通い合いがなければ成り立たない。三位一体の原理で表される3つのペルソナは神の愛の実現とその結果のための必要の条件だと考えられなくもない。その「動」である神は、一方で、永遠だという。しかも、人間はImago Deiとして造られたという。「動」の中に整合性を保ちつつ、永久的に作動するメカニズムを追求しなければならない、と思うようになり、それがリズムの研究へとつながった。

以上のような発想は奇異に思われる人も多いだろうが、私は、わが国の学

問の発展のために、よくその必要性が指摘される「豊かな発想性」は、若い頃に「人間とは何か」という命題のついて哲学的思索を巡らすことによってその素地が養われると考えている。言語学は究極的には人間を研究する学問である。

また、「国際性」という言葉をよく耳にし、そのために外国語に熟達する必要性が説かれる。確かにそのとおりだが、同時に、独創的な意見の言える人でなければ、国際人とは言えないと思う。これはその後、国際会議に出席して得た実感である。

神戸外大3年のとき、私は、外大の初代学長であった金田近二先生のゼミナールに入った。先生はご専門の植民政策のご研究を敷衍して、「外国学」の構想を打ち出され、それを神戸外大の学問的基礎に位置づけようとした。それは本質的に今で言う「学際研究」であった。例えば、アメリカという文化圏の実態を明らかにしようとするれば、政治面、経済面、言語面、宗教面、それに文学など、いろいろな側面を総合的に研究してはじめて、その実態が浮かび上がるのであって、その1つの側面だけの研究では、ちょうどコップを真横からみて、それは逆台形をしていると描写するようなものだ、というようなことをよく言われた。外国ないし国際的問題について総合的、学際的研究を行うところに神戸外大の特色があるし、また、あらねばならないと強調された。言語の研究に、心理学や医学、情報工学など関連学問領域も取り入れて研究するようになったのは、金田先生の研究姿勢に負うところが多い。

神戸外大在学中、父が死亡し、家は極度に困窮し、大学院に進学するというようなことは考えられなかった。家計を助ける必要があり、大阪星光学院という中学・高等学校に英語の教師として就職した。英語の教師をするからには、何か研究目標を持ちたいと思って金田先生に伺ったところ、語学ラボラトリー(LL)という外国語学習設備の存在を教えて下さった。それから、金田先生のご子息で、この方面の研究のパイオニア的存在であった金田正也先生(現在名古屋学院大学名誉教授)に教えを乞う一方で、アメリカから資

料を取り寄せたり、音声学の書物を読んだりして、しばらくは、語学ラボラトリーに熱中した。ついには、大阪星光学院のマルジャリア校長先生に頼んで、同学院に語学ラボラトリーを設置して頂いた。この提案は、英語教育をカリキュラムの中心に据える同学院の教育方針と一致したこともあって、ブースの構造に特別の工夫をこらした本格的な LL が、松下電器によって完成したが、LL 自体が非常に珍しい時代であったので、完成時にはマスコミが取材に訪れ、その後もしばらくは、全国各地から見学者が絶えなかった。しかし、その運営は大変であった。当時はいわゆる LL 教材というようなものは皆無であったので、毎日の授業のために音声教材を逐一作成せねばならなかったのである。この作業は、膨大なエネルギーと時間を必要とし、毎日が戦争であった。その日の教授目標を決め、それに合わせて教材を一から書き下ろす作業に、文字どおり寸暇を惜しむ日々が続いたが、その作業を通して、英語音声学の知識と英語教授法の問題点を的確につかむことができるようになった。

また、大阪星光学院在職中に、第 2 代校長のモロ先生の特別の許可を得て、大阪市立大学の大学院に聴講に通い、大塚高信先生や荒木一雄先生の教えを受けた。

その後、東京の英語教育協議会 (ELEC)、関西学院大学、それから、神戸外大と職を移していくことになる。神戸外大に職を得たのは、外大が LL を活用して音声英語を教えることができる人材を要求したからであった。

私が英語学研究的ありかたを学ぶことができたのは、神戸外大名誉教授の小西友七先生の辞書執筆陣に加えて頂いたり、先生を会長に頂く「六甲英語学研究会」の設立に参画して、児玉徳美氏らの仲間と研究に勤しむことができたお陰である。やがて、その研究会のなかに語法研究グループと並んで英語教育研究グループが生まれることになり、これが現在の「ことばの科学研究会」へと発展していくことになる。この英語教育研究グループを創設するについて、つぎのような 1 つの信念めいたものがあつた。

外国語教師の仕事は、3種類の作業に大きく分けることができると考えられている (Anthony, 1978)。一つは教師が教壇で行う教育活動で、普通 technique と呼ばれる。いわゆる授業がこれである。他は、教師が教室に入る前に行う教育活動で method と呼ばれ、教材や教科書の作成がこれにあたる。最後に approach と呼ばれる段階がくる。これは、個々の教師の言語観や外国語教育に関する教師の信念であるといわれている。そして、この3種類の仕事は階層構造をなしており、technique は method に、method は approach に規制されるという性格をもっている。

私は、この approach の部分に人間がことばを理解し、生成し、獲得するメカニズムを科学的・実証的に追求する研究を据えることによって、外国語(英語)教育研究を cumulative な性格をもった学問体系に上げることができると考えた。これによって、外国語教育研究は空転することを免れ、研究上の進歩が見られることになる。

これまで、外国語教育の専門家と自称する人たちは、この approach の位置に、言葉の構造を既述することを目的とした従来型の言語研究の成果を、それもしばしば自分とは別の言語学者が研究した成果を、そのまま据えることで十分だと考えてきたふしがある。例えば、語法研究の分野では、精緻で膨大な研究成果が積み上げられており、教育現場はそれによって大いに裨益されている。そして、当該語法を教授するときには、その研究は大いに役立つ。しかし、そこからは如何なる授業が一番効果的かという外国語教育研究に課せられた一番重要な問いかけに答えることは出来ない。その研究がいくら積み重ねられても、授業形態のあり方を論じるころまでには至らない。当該外国語の文法構造や語法を知ることは、当然のことながら必須である。しかしそれだけでは、外国語教育の approach の部分を構成することは出来ない。そのような言語現象を生み出す人間の言語生成の過程がどうなっているか、人間の universal な言語生成の process はどうなっているか、そこから英語に独特の language specific な現象が何故生まれるのかというところ

まで突っ込まねば、教授法の改善にはつながらない。その研究が如何に大変であろうとも、外国語教育研究の性格上、それが必要なのである。そうすることによって、先程の語法や文法の教授を外国語教授のどの過程で行うのがもっとも効率的かということも明らかとなってくるだろう。

わが国の英語教育の研究者と自認する人達は、この困難だが重要な分野に敢えて挑もうとはしなかった。残念ながら、これが、彼らの研究にしばしば見られる実証性の欠如と共に、わが国の外国語教育研究を空転させることになってしまった。彼らの安易な研究は、せいぜい technique と method の面でのシラバスの作成に終始することになり、外国語教育研究の日本の学界における相対的地位を低めてしまった。たとえ教授技術面で精緻な工夫が凝らされても、これを支えることができなかったのである。このような欠点を是正しようとする研究は最近ようやく一部の人たちの手で行われるようになったものの、当初はなかなか認めてもらえなかった。

一方、衆知のように、言語学研究にも大きな変化がみられるようになった。ことばを獲得し、生成し、認識する能力は、人間のどのような生得的な装置が、どのようなアルゴリズムによってどのように作動して作り出されるものなのかという研究は、言語の研究のなかで中核的位置を占めるようになりつつある。私が、神戸外大に就職後ずっと関係してきた音声科学界は特にそのような様相を帯びてきている。このような世界の言語研究の動向を反映して、文部省の科学研究費重点領域研究（現在は、特定領域研究という）の中に「人間の認知や言語の成立およびその成長の機構」の解明を旨とする研究集団が形成され、平成元年から現在まで、多少その組織を変えながらも、継続して研究が続けられている。私は、日本語についてこのような研究集団を最初に組織された大阪樟蔭女子大学の杉藤美代子先生のお勧めで、「リズム班」の研究代表者としてこの研究集団に初めから参画することができた。それ以来私は、その研究集団の中で、言語学はもちろん、言語障害治療、情報工学、心理学、神経医学、耳鼻咽喉科学、動物コミュニケーションなどの言語に関



係する諸分野の日本の代表的研究者と接触し、啓発されながら研究を進めることができるようになった。これは私にとって望外の幸せであった。

これに先立って、私は神戸外大の内地留学の制度を利用して東京大学音言語医学研究施設に留学したが、これは医学に無知だった私に医学の常識を植え付けてくれた。

以上のように、音声英語要員として神戸外大に就職して以来27年間、その方向に向かって努力してきたとはいえ、結果として、英語学研究の伝統から多少はずれた研究に没頭してきたように思う。これができるのは、そしてこれによって研究上の信念が貫けたのは、神戸外大のリベラルな学風のお陰だと思っている。

私の研究は、時に大規模な実験を必要としたが、神戸外大の事務局はいつもこれを支援して下さった。特に、乳幼児の非母国語の音声弁別の発達的变化についての実験の際は、当時の事務局長 加茂川 守氏、庶務課長の渡邊国士氏、庶務課主幹の渡邊秋男氏は、神戸市の保健所、保育園の協力をとりつけて下さった。お陰で、3年間で300人を超える1歳以下の乳幼児を被験者として集めることができた。同じテーマを追いかけた他の国立大学が、被験者が集まらなくて研究が挫折したことと合わせ考えれば、このご協力が如何に貴重であったかがわかる。心からお礼申し上げたい。

最後に、私の研究を常に期待を込めて見守ってくれた学生諸君にお礼を言いたい。あなた方の存在が、常に私の研究の励みであった。

学生として、教員として30年以上通った神戸外大には限られた紙数では言い尽くせない思い出と感謝の気持ちがつまっている。私を育ててくれたこの神戸外大の今後の一層のご発展を念じつつ筆を擱く。